

北海道師範塾 塾頭通信

「教師の道」

第732号 平成26年5月9日

月と蛇と縄文人

伊達市噴火湾文化研究所長であり北海道考古学会会長の大島直行氏は、考古学会の異端児といわれていますが、その大島氏は今回、1冊の本「月と蛇と縄文人」を上梓しました。



表紙が大島氏の思い入れもあってかなり衝撃的なデザインとなっており、この本を手にしてカウンターに行くのは少し勇気がいるかも知れません。

さて、大島氏は考古学会の異端児といいましたが、異端児というからには正統派というものがあるという事になります。大島氏の言によれば、戦後、多くの考古学者は「史的唯物論（唯物史観）」というものの考え方で縄文社会から「発展」を読み解こうとして来たといえます。

つまり、人間は労働（技術）によって物質的な生産性を高め、合理的・科学的な思考方法を発展させて来たというものですが、考古学ではこうした考え方（史的唯物論）が正統派という事になるのだと思います。

これに対して大島氏は、考古学者は土器を作った縄文人を「作業」とか「労働」という視点でしか見ようとして来なかったと指摘すると共に、そうした発想や手法では「縄文人は何故あの様な形の土器を作ったのか」という深層（縄文人の心）を解き明かす事は難しいと指摘しています（同氏著「月と蛇と縄文人」から）。

従来考古学者は、縄文人が作った土器は煮炊き用の鍋と説明して来ましたが、それならば何故、縄文人の作った土器は底が尖っているのでしょうか。あの土器の形を見る度に、使いづらくはないのかと思ってしまうのですが、

従来の考古学では、縄文人が何故、土器をそのような形にし、縄目の文様を付けたのか、明快に説明してはいません。

「月と蛇と縄文人」は、こうした正統派考古学に対して一石を投じるものであり、今後の正統派考古学者の反応に興味を湧きます。

「月と蛇と縄文人」を読んでいると、大島氏が、脳科学、心理学、更には文化人類学や宗教学等様々な手法を駆使して、縄文人の心に迫ろうとしている事を強く感じます。それは、従来の考古学の枠を遙かに超えるものです。

大島氏が従来の考古学から脱皮しようとしたのは、ドイツ人の日本学者ネリー・

ナウマンとの出会いでした。

ナウマンは、「呪術宗教的視点」から縄文土器の象徴を分析していますが、大島氏は、こうしたナウマンの研究を通して、縄文人の思考方法が「呪術宗教的思考方法」であり、それは象徴的思考の形をとる事を学びます。そして、象徴的思考の代表が「母性性＝グレートマザー」であり、この「グレートマザー」は「女性」そのものであったり、「子宮」であったり、更には「蛙」や「蛇」に姿を変えているというのです。

縄文人にとって、「月」や「子宮」、「蛙」、「蛇」というものは命の根源であり、不死や蘇りの象徴だったに違いありません。

大島氏は更に、縄文人が象徴を具体的に土器や土偶に表現するために「レトリック」という手法を取り入れているとしています。

大島氏は、「月と蛇と縄文人」の中で

- 縄文土器は本当に鍋か
- 土偶のワキはなぜ甘い
- 死者をなぜ穴に埋めるのか
- 竪穴住居になぜ住むのか

といったテーマについて、「グレートマザー」「イメージとシンボル」「レトリック」をキーワードに明快に解き明かしてくれており、読む者の目を開かせてくれます。

私は「月と蛇と縄文人」を読みながら、縄文人は、現代人とは違って、森も山も大地も彼らを取り巻く世界が極めて大きな霊力を持っていた、そんな時代に生きていたのであり、縄文時代、そして縄文人の心を現代の鏡に写し出すようにして見ているだけではいけないのだと、改めて感じさせられたところです。

(塾頭：吉田 洋一)